



灯はほのかに輝きて、母屋の隙に立たる風景の中に、限々しへ見ええた。物の音ひじひじて黙みながら、背後より寄り来る心地す。」惟光、疾く参らみとへて思す。在り處定めぬ者ハ、夜行してかう難ねけるほどに、夜の明べが暮れど久しう。千葉。

夕顔(タケの死) No. 4